

ました!

転職によって、以前より輝いた自分になるために、何が大切なのか? 転職を生かした9人の女性たちと、キャリアアカウンセララーの小島貴子さんに話をお聞きしました。

アドバイス / 小島貴子さん



こしま・たかこ
 キャリアアカウンセララー。立教大学コオプ教育・インターンシップオフィス勤務。若年者、女性、中高年対象に独自の手法で就職指導を行ない、就職支援者は1000人を超える。

必死さから生まれたゆとりが評価されて

昇進

富士食品工業(株) 係長
阿久井薫さん



小 学校の先生になりたいと、大学の教育学部で学んだ阿久井薫さん(34歳)。ところが卒業後に選んだのは食品メーカーだった。

「卒業してすぐ教師になると、社会を知らない人間になってしまいうそで。その前に企業に入って、3年くらい社会勉強をやってみようか。そんな動機でした」

最初の転職は入社2年半後。コンビニエンスストア部門であるデリカ食品部(現)が新設され配属。コンビニ向け商品のメニュー開発、提案を担当することになった。

「まさにゼロからのスタート。マーケティングリサーチから商品開発に至るまで手探りで積み上げ

ていきました。コンビニ向け商品はプレゼンから2、3カ月で店頭と並んでしまうほどスピード感がある。反応が速いところが面白く、私の性に合っていましたね」

社外研修で学んだことで自身の専門分野を深めた

29歳で主任に昇格。部の3番目、商品開発部門のリーダーとして、いくつもの山を乗り越えた。こうして必死に突っ走っていくうちに、デリカ食品部は軌道に乗った。ところが阿久井さんの心に、ある不安が芽生えていた。

「このまま自信を持って進んでしまってもいいの? と疑問に思ったんです。そして専門機関での研修を会社に願いました。食について広く学び直し、しっかりと土台をつくりたかったから」

前例のない申請だった。しかし熱意が認められ、1年間、勤務と並行してジャパン・フードコーディネーター・スクールに通うことに。「食とつながる幅広い分野を学べたことで、視野を広げられたし、何より社外に出たことで、心にゆとりが生まれましたね」

「必死さ」から解放されて生まれた「ゆとり」。それが仕事に好結果を及ぼした。29歳で社内結婚し、31歳でデリカ食品部の係長に昇進。女性は結婚退社の多い社内

風土にあって、異例の昇進だったという。

「いつの間にか評価され、昇進していたというのが正直なところ。昇進によって、部の運営方針や部下の教育に関わる責任が増えたけれど、環境的、心境的に以前とさほど変化はありません」

いずればこの仕事を通して親子の「食育」を進めるのが夢。「大学で学んだ教育に結びつけられれば、やりがいも増えますね」
 気張らず、柔らかに微笑む姿。優しい。先生。そのものだった。

小島貴子さんから読者のあなたへ

部下に協力を求める

女性が昇進で抱えるストレスの多くは、部下との人間関係です。しかし、上司になればなるほど、部下の協力が不可欠。昇進したら「私はみなさんの責任をとります。ただし、私はみなさんに助けてもらいたい」と部下に宣言しましょう。男性や年上の女性が部下になったときも「やりにくいですがね。気になることがあったら言ってください」と声をかけることが大事。いずれも、最初に自分の意志を伝えることが大切です。